

ている。本誌では各調査出土の主要な木簡を既に紹介したが、本誌未報告の調査の存在が判明したため、ここに報告する。

木簡が出土したのは、一坪南辺の奈良時代末期（一坪占地の時期にあたる）の井戸SE四八八五で、井戸枠は一辺八〇cmの方形縦板組隅柱横棧どめ、掘形は径二・一mの円形、深さは二・九mで、底に円礫を敷き、径六八cmの円形曲物を据える。木簡は掘形と井戸枠内から各一点、計二点出土し、井戸枠内の一点のみ積読できた。

8 木簡の釈文・内容

(1) 「く厚狭郡地子米五斗」

1.3×2.3×3 0.32

長門国厚狭郡の地子米の荷札である。公田の地子米は太政官の雑用に充てられ、同じ一坪の井戸SE五一四〇や同坪の包含層から墨書土器「官厨」が出土したことから、旧長屋王邸に設けられた光明皇后宮の廃絶後再び国家の管理下に置かれたこの地が、奈良時代末に太政官厨家として利用された状況が窺える。長岡京の太政官厨家は左京三条二坊八町にあり、平城京における位置をほぼ踏襲していると考えられる。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所『平城京木簡』一（一九九六年）

同『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』（一九九六年）

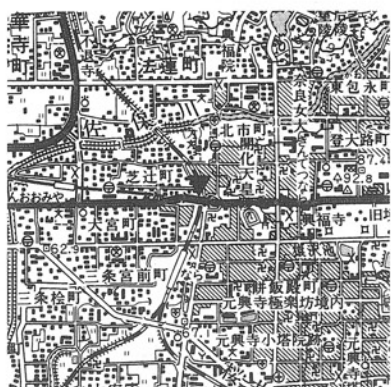
（渡辺晃宏）

奈良・平城京跡左京三条五坊十坪

へいじょうきょう

- 1 所在地 奈良市芝辻町一丁目
- 2 調査期間 二〇〇三年（平15）四月～八月
- 3 発掘機関 奈良県立橿原考古学研究所
- 4 調査担当者 清水昭博
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 飛鳥時代～平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地点は左京三条五坊十坪の西辺で、東五坊坊間路が想定される位置にあたる。



（奈良）

調査の結果、飛鳥時代、奈良時代、平安時代の三時代の遺構を検出した。奈良時代の遺構には、東五坊坊間路とその東側溝、坪を区画する溝、宅地を囲う土塀基壇と門、土器埋納遺構などがある。

東五坊坊間路とその東側

溝（幅約二・二m深さ〇・二五m）は延長約三六m分を検出した。東側溝は、当初通常の京内の条坊側溝と同様、素掘りであったが、後に宅地側にあたる東側面と西側面の一部に玉石積みみの護岸を施している状況を確認した。木簡は、東側溝から土師器・須恵器などともに一点が出土した。

調査地北半では東側溝に接続する東西方向の溝を検出した。この東西溝は、坪を南北に二分する位置にあたり、坪の区画に関わる溝と考えられる。土塀基壇は幅約〇・八m高さ約〇・一五mの高まりで残り、側溝の東側約一mに平行する。延長約一七m分を検出した。また、調査区北端では南北二間分の掘立柱列を検出した。土塀の延長線上に位置することから、門跡と推定される。

土器埋納遺構は坊間路東側溝と東西溝によって区画される北側の宅地の南西隅で検出した。完形の土師器壺の中には植物種子、和同開珎一枚、鉄製人形六点（一点は頭部のみ）、銅製人形五点、金属滓、ガラス玉二個、石英粒、木葉など多様な品々が納められていた。

8 木簡の釈文・内容

(1)

・「上」天四〇〇〇〔月カ〕
進出人夫四人右
「上四日注道入」道カ

・「十二日申時將」
旧〇

(129)×36×3 019



(赤外線画像)

上端は切り折り調整による加工で、原形をとどめる。下端は折損している。左右両側面は原形をとどめる。もともと短冊形の文書木簡であったものが習書木簡として二次的に利用され、最終的に二つに折られて廃棄されたとみられる。書かれている文字の墨色・筆跡はいずれもよく似ており、重ね書きの部分も含めて全て同一人物によって書かれたものと考えられる。人夫四人を派遣したことに關する木簡であるが、作業内容や出土地点との關係などについては明らかでない。

9 關係文献

奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡調査概報 二〇〇三年（第一分冊）』（二〇〇四年）

(1)~7・9 清水昭博、8 鶴見泰寿)